

下つ巻 反正天皇

一、弟 いろと オトとも訓める。イザホワケ（履中）の段の冒頭（二八八頁）に「子」とあるのと同じく、ここにも「弟」とある。イザホワケの同母弟である。

二、天皇の年齢の数え方と一年二歳説（尾崎左永子「新訳古事記」）

○「古事記を讀み来たりて、このあたりで氣付き、かつ思うのだが、仁徳天皇の事蹟に比べて、この履中、反正天皇あたりの表現が、かなり粗く少ないことが氣になる。仁徳天皇の皇統譜がとくに詳しいのは、その勢力、血脈が後世につづくせいもあるのだろうが、この辺の帝紀、本辞ほんじの類はあまり詳細に伝承されていなかったのかもしれない。

もうひとつ、年齢の数え方の問題がある。このあたりでは暦法による記載が注せられていて、その崩御の年と年齢を列記すると

成務天皇 <small>せいむ</small>	西暦三五五年（？）	九十五歳
仲哀天皇 <small>ちゅうあい</small>	三六二年	五十二歳
神功皇后		百歳
応神天皇	三九四年	百三十歳
仁徳天皇	四二七年	八十三歳
履中天皇 <small>りちゅう</small>	四三二年	六十四歳
反正天皇 <small>はんせい</small>	四三七年	六十歳

という比定ひていがなされている。しかし仁徳天皇以前はまだ模糊もことしていて、たとえば神武天皇百三十七歳、崇神天皇百六十八歳、景行天皇百三十七歳、と業績の多い天皇はそれだけ長命になっている。このことについては、さまざまな研究がなされているが、その一説に、農耕社会では春を一歳、秋を一歳と数える習慣だったのではないかという、民族學の方面からの指摘がある。

もつとも日の短い冬至とうじを中心にした「こもり」の時を経て、少しずつ日が伸び、草木が芽吹き、桜の咲く春。この花さかりに「花見」をして人々のエネルギーを凝縮ぎようしゆくし、秋のゆたかな「稔り」を予祝する。種粃たねもみを育て、梅雨つゆの雨の中で稲の苗を植える。早苗さなえ、皐月さつき、早乙女さおとめ、五月雨さみだれ、ここに冠かんされた「さ」は、たんなる接頭辞ではなく、「神聖しんせい」という意味があり、「稲の穀靈こくれい」を意味するともいう。それは「さくら」も同じで、「さ」は穀靈、「くら」は

「座」で、あの五弁の小さな花のひとつつに、稲の霊が座っているという考え方があったのである。その穀霊に対して、皆がエネルギーを添え、秋の収穫を祈るからこそ「花見」であるという。「見る」とは、相手に力を与えることなのである。

そして暑い夏。日照りの下で農耕民は黙々として働く。女はその間に、糸を作り、機を織る。麻を育て、綿を紡ぎ、蔓を打ち、支配者のために蚕を飼ひ、絹を作る。日々の炊事も、恋も、子育ても、現代からは想像もつかない苛酷さがあつた。だからこそ祈りも切実であつただろう。やがて秋の稔りがもたらされ、まず神前に新しい初穂を供えて感謝する「新嘗」（のちには「にいなめ」と転訛）の祭が、宮中を中心におこなわれる。まさに収穫祭である。そして人々は次の段階の種籾の準備をし、薪を集め、冬ごもりに入るのである。

この春と秋を中心とする「春秋」のめぐりを、古代の人は一歳とせず、二歳と数えたのではないか、というのである。たしかに、古代から「春山の霞壯夫」「秋山の下氷壯夫」のような「春秋あらそい」の系譜があつて、その伝統は「萬葉集」にも「古今集」にもつづき『源氏物語』の「春秋あらそひ」につづいている。春と秋とどちらが好きかというのだから、結論が出ないし、勝負もつかない「淨い」であつて、これも「見る」と同じく、いわゆる「心寄せ」の行事化した形であろう。

この「二年二歳説」は、とくに定説化しているわけではなく、反対の説も多いのだが、いま、この「履中記」「反正記」に関して思うに、反正天皇の崩年「六十歳」にして正式に記載されている妃が、丸邇の臣の女二人のみ、その御子四柱のみ、というのは些かおかしい。これが半分の三十歳ならまだしも理解のうちだが。何よりもこれから先、仁徳天皇の後継者の間で起こる皇位継承争いのつづく中で、時代はしだいに歴史的な事実と符合していくのだが、そのうえでなお、あくまで歌物語として受けとめる筋を外すまいとする思いが肝要であることは言をまたない。

三、木梨之輕主

木梨は地名か梨の一種か不詳とされるが（「記伝」、実の妹に密通した話

が次にかたられてゆく点から、キナシは柵無、つまり実の兄と妹との間をへだてる垣をふみ越え、それを無くするのにもとづく名に相違ない。キナシノ王とは、実の妹をひそかに恋した物語とわがちがたい名であることが納得される。万葉集に

○「刈り薦の 一重を敷きて さ寝れども 君とし寝れば 寒けくも梨」（万一一・二五二〇）（刈り薦の敷物一枚だけで寝ているが、あなたと一緒に寝ているので寒いこともありません。）

○「大きな海に 立つらむ波は 間あらむ 君に恋ふらく 止む時も梨」（万一一・二七四一）（大海に立つ波は、止む間もあるでしょうが、あなたに恋することは、止む時ありません。）とあるごとく、「無し」を借字「梨」であらわす例があるのも木梨＝柵無とする考えを支えることになる。

四、境之黒日子王

境は大和地方の地名、黒日子は下の八瓜の白日子王と対をなす名。この二人がともに雄略に殺されるのは次の安康記（二〇一頁）に見る通りだが、雄略紀には坂合黒彦と記し、さらにその焼き殺されたとき、坂合部連贄宿禰というのがこの皇子の屍を抱いたとある点から、「記伝」はこの人は乳母方のもので、境は乳母の姓かといっている。

五、軽大郎女 兄の軽王と対をなす名だが、兄の方だけに「木梨之」とあつてここにそれがないのは、禁を破る宮為にさいし、妹はどこまでも受身の立場と見ていることによる。古事記編集者の繊細な感性がうかがえる。

六、友緒

伴の緒、伴の男とも記す。一定の職業で朝廷に仕える人。特に男子（広辞苑）。

○「鞆掛くる伴の男広き 大伴に 国栄えむと 月は照るらし」（万七・一〇八六）（鞆を負う勇士の多いお大伴の地に、国が栄えるようにと、月は照っているらしい。）

七、姦けて

「姦」が本字、字音はカン、ケン。字義は、よこしま、わるい、心がねじけて正しくない、いつわる、盗む、みだす。おかす、みだら、淫行。

了